

令和3年度 学校評価報告書 (目標設定 実施結果)

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価 (3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①生徒の学習意欲を高め、個に応じた進路実現を図るため、組織的な授業改善や「課題研究」等の充実に取り組む。</p> <p>②Ⅱ期「プログラミング教育」の研究推進校として、研究と実践を深める。</p>	<p>①「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた組織的な授業改善と探究的学習等の活動を推進する。</p> <p>②「プログラミング教育」の研究や実践を授業改善に活用し、「総合的な探究の時間」等を含む全教科への取り組みとして推進する。</p>	<p>①100分授業を充実させるため、調べ学習や発表の機会を多く設けることにより生徒が能動的に参加できる授業手法を研究し、授業改善に努める。オンラインでの指導を推進させ、ICTの効果的な活用方を研究し、情報共有を行う。</p> <p>②プログラミング教育の5つの視点を意識した授業改善の取組を全ての科目で行う。公開研究授業を積極的に行う。</p>	<p>①生徒が主体的に授業に取り組むことができたか。「総合的な探究の時間」「課題研究」により、充実感や自己肯定感が高まったか。ICTの効果的な活用により、生徒の理解が深まったか。工夫した授業展開であったか。</p> <p>②生徒が教科指導を通して、プログラミング教育の5つの視点を意識し、教科の理解や探究的活動等に、その視点を広げることができたか。</p>	<p>①全教科でClassroom等を活用したオンライン授業と対面授業を併用した。100分授業の中で、調べ学習や発表の機会を多く設けることで「主体的・対話的で深い学び」が実現できた。オンライン授業掲示板を活用し、授業の手法や工夫を職員で共有し、授業改善に成果があった。また、「課題研究発表会」を体育館で実施し、充実感や自己肯定感が高まった。</p> <p>②プログラミング教育の5つの視点を意識し、各教科で研究授業に取り組んだ。互見週間を設置し、2つ以上の授業を見学し、改善に成果が見られた。</p>	<p>①Classroom等を活用したオンライン授業には、継続した授業研究が必要である。周辺機器の整備や、職員間の情報共有と意見交換を活発にすることで進んでいきたい。また、「主体的・対話的で深い学び」の一層の充実のため、少ない職員で「課題研究」に取り組むための工夫や改善が必要である。</p> <p>②プログラミング教育の指定事業が継続となり、3年間の成果を他校に発信しながら、スムーズに新校に引継ぎ準備が必要である。</p>	<p>・コロナ禍において、全教科でClassroom等を活用したオンライン授業と対面授業を併用し、生徒の学習の質を確保している。</p> <p>・課題研究をはじめ、調べ学習や発表の機会を多く設ける取り組みは素晴らしいと思う。先生方のご指導の成果だと感じた。</p> <p>・オンライン授業が必須の現状で、オンライン授業や対面授業の手法を工夫し、職員間で課題を共有している。全教科での授業改善も評価できる。</p> <p>・コロナ禍におけるプログラミング教育について心配していたが、すべての教科においてプログラミング教育の考え方が根付いているようである。3年間の成果が、よく現れている。</p>	<p>①【成果】ICTを活用した授業力向上の意識が高まり、多くのオンライン授業が実践された。対面授業とオンライン授業をハイブリッドで活用することで、各職員が100分授業をさらに効果的に運用し、授業改善につながった。</p> <p>【課題】職員間の情報共有と意見交換、研修会等を活発にすることでより一層の取組が必要である。</p> <p>②【成果】今年度もプログラミング教育の5つの視点を意識した研究授業を全ての教科で実施し、3年間の研究指定で定着させることができた。</p> <p>・国立教育政策研究所教育課程研究指定校、県プログラミング教育研究推進校としての研究成果、授業実践の実績を「研究紀要」にまとめ、配布した。</p> <p>【課題】これまでの研究と実践を振り返り、新校への継承、さらに発展させるための取組みを検討する。</p>	<p>①対面授業とオンライン授業のバランスとICTの利活用については、より効果的に生徒の理解が深化するよう更なる改善を追求する。授業を互見することで、授業改善を進め、生徒が能動的に学習に取り組める授業手法を共有し、学校全体の授業力の向上に努める。職員が減少するが、「課題研究発表会」を活用することで生徒に達成感、充実感を持たせるため、指導方法、実施方法を工夫改善する。</p> <p>②プログラミング教育の新たな目標を設定し、引き続き全ての教科で授業研究を行う。その成果と課題を、新校における「高い情報活用能力」の育成に継続できるよう準備する。専門教科情報科の学校設定科目においては、教材や指導・評価方法について引き続き研究を進める。</p>
2 生徒指導 ・支援	<p>①部活動の活性化を通して、責任感や連帯感の涵養を図る。</p> <p>②生徒一人ひとりに対するきめ細やかな支援と規律正しい学校生活への指導の充実を図る。</p>	<p>①様々な学校行事と部活動への積極的な取り組みを充実させ、学校全体の活力とする。2つの年次の連帯感を深める。</p> <p>②生徒情報を共有し、生徒理解を深めることで、個に応じた適切な支援を行う。また、規範意識の向上に努める。</p>	<p>①「部活動行こう週間Ⅱ」を実施し、最終学年となる20年次の部活動への参加と入部を促す。学校行事では、企画から実施まで年次間の連携強化を図り、取り組む。</p> <p>②各種会議にて生徒情報を共有し、SCを利用してコア会議を定期的に行う。相談窓口を広げ周知する。</p>	<p>①部活動を通して、学校生活や日常の生活に改善が見られ充実感や達成感が感じられたか。学校行事終了ごとに、アンケート等を実施し、結果に充実感や満足感が得られたか。</p> <p>②家庭や外部機関との連絡を密にし、組織的に支援ができたか。生徒がより相談しやすいう環境を整えられたか。</p>	<p>①学校行事を通して、生徒同士が年次を超えて協力・連携する場が多くみられ、アンケートからも充実感が得られた結果となった。最後まで部活動を続ける生徒が多く、部活動見学会等を実施したことで、新たに加入する生徒も見られた。</p> <p>②年次の教育相談コーディネーターを中心に、管理職、SC、教職員が連携を図り、ケース会議やコア会議を通して迅速な情報共有を図った。SCの利用者が増加し、外部の相談機関を周知するなど相談しやすいう環境を整えることができた。</p>	<p>①最終年度となり、1学年での学校生活となる。職員も減少し、学校行事や部活動等の実施方法と形態、工夫や改善も必要である。充実感や満足感が得られるよう、最後まで活気ある教育活動を維持することが最大の課題である。</p> <p>②生徒相談の多くの事例では、家庭環境に大きく影響している。外部機関との連携を強化し、保護者や家庭への支援についても取り組みたい。教職員間の情報共有を密にし、チームで個々の生徒に応じた丁寧な指導をより一層推進したい。</p>	<p>①部活動の生徒引退とともに学校全体の活気低下が心配されるが、生徒が最後まで母校を誇りに思えるような学校づくりに努めてほしい。</p> <p>②家庭環境等の問題であれば、必要に応じて地域連携として協力することができる。今後は、地域の民生委員なども積極的に生徒支援に活用をして欲しい。</p> <p>・コロナ禍における教育活動や新型コロナウイルス感染症対策をHPで拝見し、感染症対策等もしっかり行っている様子が確認できた。自分の学校での取組みに、大変参考になった。活用させていただきたい。</p>	<p>①【成果】運営の工夫や年次間の連携協力により、生徒が満足感を実感できる学校行事の実施ができた。部活動では、少人数ながら練習方法等を工夫し、様々な大会に参加することで最後まで継続することができた。</p> <p>【課題】行事や部活動を最後まで実施し、少ない人数でも生徒の満足感を引き出すための工夫を検討する。</p> <p>②【成果】生徒情報の共有を密にするために各年次会、企画会議、職員会議を上手く活用できた。また、必要に応じてケース会議を開くことができた。SCや外部関係機関と連携を図ることにより、課題解決に繋がった。</p> <p>【課題】情報共有により教職員の生徒に対する理解は高まったが、より複雑な課題を解決していくために保護者や外部関係機関、地域との連携体制を整備する必要がある。</p>	<p>①地域、卒業生や保護者等の力を活用し、様々な行事を活性化する。生徒の意見をアンケート等で傾聴し、協働することで、一つ一つの行事を思い出に残る有意義な活動として企画、実施する。部活動で頑張る生徒を、年次と学校全体で応援し、引退後は進路実現に向けてすぐに切り替えができるような支援体制を構築する。</p> <p>②教育相談コーディネーターを中心に、担任や育成グループ、養護教諭などの教職員間の連携はもとより、SCや外部関係機関との連携の強化が必要と考える。情報共有を密にするため、その機会を増やし、一人ひとりに寄り添った教育相談体制をより一層強固なものとする。</p>

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価(3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①進路希望の実現に向けて、生徒が主体的に目標を設定し、計画的に実行できる指導・支援の確立を図る。	①生徒が主体的に進路選択できるように、校外での体験、外部テストの活用や三者面談の充実を図る。また、生徒の進路選択に有益な、正確で丁寧な情報提供を行う。	①年次進行に合わせて、計画的で効果的なガイダンスを実施する。三者面談を活用し、個々の進路に応じた、きめ細かい進路指導を行う。進路室の充実を図る。	①多くの生徒が、希望の進路を実現できたか。卒業時に、進路未定の生徒が減少したか。三者面談の活用の機会が増え、効果があったか。	①対面とオンラインを併用し工夫することで、面談の設定や進路指導に関わる行事を予定通り実施した。生徒一人ひとりに丁寧な指導を行い、大学進学を希望している生徒の90%以上が目標を達成した。進路未定者は昨年と同様、数人であった。	①職員数の減少で、これまで実施してきた進路指導の行事を含め、業務の効率化をどのように進めるかが課題である。個々の進路希望に応じた指導を実施し、面談等をより充実させ、進路実現に尽力したい。	・進路指導において教職に興味を持つ生徒が増加することを期待する。学校間の連携を促進し、生徒が児童とかかわる機会が増え、教職を志す生徒が増えればと思う。そのような視点でもキャリア教育に力を入れて欲しい。 ・課題研究の担当教員が生徒一人ひとりの進路指導を行う取り組みは素晴らしいと感じた。	①【成果】四年制大学進学希望者の実現率が昨年度の84.5%から100%に向上した。多くの生徒が進路の希望を実現した。 【課題】教員数が減少する中で、きめ細かい進路指導をどのように確保していくか。 公務員希望者の合格率をどのように向上させるか。(受験者7名に対して合格者1名)	①個々の生徒が、進路決定に向けて主体的に行動できるよう、早く正確な情報提供を行う。また、担任のほか、「課題研究」の担当者も積極的に進路支援を行う。 公務員志望者には、対策講座を充実させる。特に、面接指導に重点を置き、「職業一般」の授業時では、試験対策のほか、面接の実践練習の機会を増やす。
4	地域等との協働	①地域との交流や協働を深め、地域に信頼され開かれた学校づくりを推進する。	①外部(近隣小中学校・企業・大学・専門学校等)との連携や協働を強化し、地域の教育力を積極的に取り入れる。	①継続して行われている様々な外部連携や協働に、生徒がより積極的に参加できるよう工夫し、新たな取り組み方法についても検討する。完校に向けて、地域との連携を図る。	①地域に貢献することで、本校の教育活動が理解され、信頼が高まったか。地域と協働しながら、完校への準備が整えられたか。	①コロナ禍の状況であったが、大学との連携授業は継続して実施した。また、規模を縮小しながらも、工夫を加え、地域や企業とも協働した。学習活動の成果は、TVや地域紙、企業の社報等に発信し、活性化に努めた。	①最終年度も、大学との連携授業や地域の保育園、小学校等との連携を継続させる。また、内容や方法を整理し、新校にどのように引継ぐかが課題である。学校運営協議会を積極的に活用したい。	・コロナ禍以前より、連携事業について大変感謝している。地域において、本校の児童を見守っていただき安心して通学させられる。諸事の対応にも感謝している。 ・以前から継続している連携を引き続き継続してもらいたい。授業における連携は大切にしていきたい。	①【成果】コロナ禍で地域や上級学校との連携活動が制限されたが、インターンシップの実施や校外講座に参加するなど生徒が積極的に校外と関わる機会を充実させた。また、広報活動、学習活動の成果を伝えるため、マスコミや地域情報誌を積極的に活用した。 【課題】連携活動の質・機会をこれまでのように維持、継続するための工夫。	①コロナ禍においても、連携による学習活動の充実と確保を最優先に考え、新校に向けて維持、継続する。引き続き学習成果の広報活動を積極的に行い、最後まで本校の魅力を伝え続けることで、モチベーションの維持向上に努める。
5	学校管理 学校運営	①生徒の安全・安心な学校生活を維持するため、すべての職員が変化に迅速に対応し、積極的に課題に取り組む学校組織を構築する。 ②再編・統合を計画的に推進する。	①風通しの良い職場環境を心掛け、事故不祥事防止に努める。また、学校運営協議会を活用することで、組織的な課題解決力の向上を図る。 ②2年後の再編・統合に向けた業務を計画的に遂行する。	①連携と協働を意識し、相談しやすい職場環境を構築する。教職員一人ひとりが、自身の問題として考えられるよう工夫し、事故防止に努める。学校運営協議会を積極的に活用する。コロナ感染症防止対策に努める。 ②再編・統合に向けた課題を整理し、組織的、計画的に遂行する。完校に向けた事業計画を推進する。	①全ての職員が、組織的に効率よく業務を推進することができたか。事故不祥事防止が徹底できたか。学校運営協議会を活用できたか。コロナ感染症防止対策を徹底することができたか。 ②再編・統合に向けた業務が実行できたか。準備委員会等を組織し、事業計画が立案できたか。	①教職員一人ひとりが業務の効率化と協働に取り組み、スムーズな学校運営に成果を挙げた。グループワークやDVDを活用し研修を充実させ、職員の意識を高めることで、事故不祥事防止を徹底した。昇降口に非接触型体温測定器を設置し、昼食時には必ず放送で注意喚起するなど、コロナ感染症防止対策を徹底した。 ②再編・統合に向けた業務を遂行した。もう少し、組織的に取り組む必要があった。	①活気ある教育活動を継続するためには、職員のモチベーションの維持が重要である。特定の職員に業務が集中しないように協働し、多忙感が少しでも減少するように、より一層チームワークの向上が課題である。適材適所の業務分担を推進する。職員相互の声掛けで、事故不祥事防止を徹底する。 ②再編・統合の計画を早期に見直し、その業務を確実に遂行する。全職員で取り組む。	・不祥事防止に努め、会議や研修等に熱心に取り組んでいる様子が確認できる。事故のない現状からも、評価できる。 ・再編・統合に向けて、どのような取り組みをしていくのか、行事などを計画しているのか様々な方法で周知してほしい。 ・再編・統合にあたり、相模原総合高校の良さを、進行に継承するべきである。	①【成果】不祥事ゼロを目指し、ゼロプログラムの取組課題を抽出し、目標別にリスクや達成状況を再検討した。特に、教職員一人ひとりに、事故不祥事発生の危険や自覚を促し、業務体制を絶えず改善した。 【課題】少ない教職員での新たな協力体制を構築する。いつでも話し合える「風通しの良い職場づくり」により一層取り組む。 ②【成果】再編・統合に伴い職員数が減少したが、活気ある職場づくりを常に意識し、活動できた。 【課題】職員のモチベーションの維持や特定の職員に業務が集中しないように協働し、多忙感や孤独感をなくすようチームワークを向上させる取り組みを構築する。	①年次会やグループ会議、企画会議等の様々な機会に、気になることを情報交換し、個々の職員が不祥事防止に向けて高い意識を持つように努める。不祥事防止研修を充実させる。 ②再編・統合の最終年度に向けた課題を再整理し、組織的、計画的に遂行する。完校に向けた事業計画を推進するため、全職員で取り組む必要がある。最後までチームワークを大切にす。